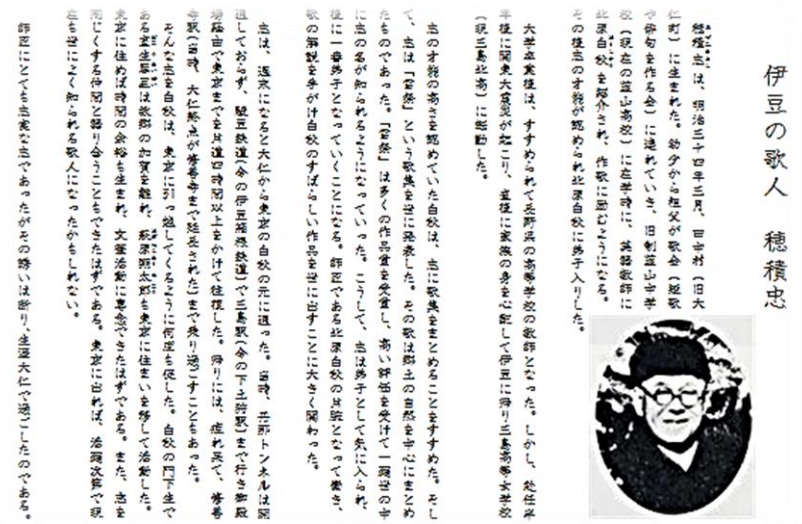
イ　歌人「穂積忠」～郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度～



伊豆の歌人　穂積忠

穂積忠は、明治三十四年三月、田中村（旧大仁町）に生まれた。幼少から祖父が歌会（短歌や俳句を作る会）に連れていき、旧制韮山中学校（現在の韮山高校）に在学時に、英語教師に北原白秋を紹介され、作歌に励むようになる。その後忠の才能が認められ北原白秋に弟子入りした。

大学卒業後は、すすめられて長野県の高等学校の教師となった。しかし、赴任半年後に関東大震災が起こり、直後に家族の身を心配して伊豆に帰り三島高等女学校（現三島北高）に転勤した。

忠の才能の高さを認めていた白秋は、忠に歌集をまとめることをすすめた。そして、忠は「雷祭」という歌集を世に発表した。その歌は郷土の自然を中心にまとめたものであった。「雷祭」は多くの作品賞を受賞し、高い評価を受けて一躍世の中に忠の名が知られるようになっていった。こうして、忠は弟子として先に入られ、後に一番弟子となっていくことになる。師匠である北原白秋の片腕となって働き、歌の解説を手がけ白秋のすばらしい作品を世に出すことに大きく関わった。

忠は、返京になると大仁から東京の白秋の元に通った。当時、丹那トンネルは開通しておらず、駿豆鉄道（今の伊豆箱根鉄道）で三島駅（今の下土狩駅）まで行き御殿場経由で東京までを片道四時間以上をかけて往復した。帰りには、疲れ果て、修善寺駅（当時、大仁終点が修善寺まで延長された）まで乗り過ごすこともあった。

そんな忠を白秋は、東京に引っ越してくるように何度も促した。白秋の門下生である室生犀星は故郷の加賀を離れ、新原泰太郎も東京に住まいを移して活動した。東京に住めば時間の余裕も生まれ、文筆活動に専念できたはずである。また、忠を同じくする仲間と語り合うこともできたはずである。東京に出れば、活躍次第で現在も世によく知られる歌人になったかもしれない。

師匠にとても忠実な忠であったがその誘いは断り、生涯大仁で過ごしたのである。

○ねらいとする道徳的価値

地域社会は都市化や過疎化によって愛着や郷土意識が希薄になっている傾向がある。しかし、地域社会のもつ教育力があらためて強調されているように、地域社会の自然や文化は、子どもたちの成長にとって大切な環境である。その環境の中で、生徒は少なからず、地域の人々との関わりから成長している。また、教科指導においても、地域の身近な教材を積極的に活用して理解を深めるだけでなく、郷土の良さについて目を向けるようにしている。～中略～生徒が自分だけで存在しているのではなく、**「家族」や「地域社会に尽くした先達」によって支えられていることを自覚して、その先人の努力によって築かれ守られてきた郷土の自然や文化への尊敬や感謝の気持ちを育むために、とても意義のあるものと考えこの主題を設定した。**

○教材について

大仁の歌人穂積忠は北原白秋や折口信夫の一番弟子として有名だが、生涯伊豆地区の教師として大仁を離れることがなかった。

★実話ということから、力強く生き抜いた穂積氏の姿を感動的に受け止め郷土を改めて考えねらいに迫ることができた。

ウ「下校途中で」～自主、自律、自由と責任

下校途中で

「なかなかやまないね、おばあちゃん……」

「こんなに降り続くと狩野川は大丈夫かね。」

「狩野川？大丈夫でしょ。なんでそんな心配するの」

おばあちゃんは私の言葉に続くように、六十年前の話を始めた。

私の住んでいるこの町は、昭和三十三年九月の終わりに伊豆地方全域を巻き込む百年に一度とも言われる大きな台風「狩野川台風」により、甚大な被害があった。当時中学一年生だったおばあちゃんは、家の人に頼っている牛を二階まで上げるように言われ、嫌がる牛を一人でなんとか上げた。路農家だったおばあちゃんの家にとって牛は大切な家族の一員だったからだ。

やっとの思いで牛を上げ終わり、二階の窓を開けると目の前に恵庇が忽然と現れていた。いつも見ていた道や田んぼは茶色の濁流と化していたそうだ。

そんな話を聞きながら、私は降り続く雨を見ていた。

翌朝、目を覚ますと雨はまだ激しく降り続いていた。

「風はないけど、気をつけていってらっしゃい。」

おばあちゃんに見送られ、私は学校に向かった。

「あぁ、こんな日に限ってお父さんもお母さんも泊まりの出張で居ないんだよな。車で送ってもらいたかったのに……」

私はぶつぶつと言いながら学校坂を上っていった。

授業中も雨は降り続いていた。

○ねらいとする道徳的価値について

中学校の段階では、周囲を気にして他人の言動に左右されてしまい、自分自身の行為が自分や他者にどのような結果をもたらすかということを深く考えないまま、無責任な言動をとってしまうことが多い。そこで、本授業では深く考えずに多数派に付和雷同するのではなく、自ら考え、判断することの大切さを自覚させたい。日常生活の中で子どもたちは様々な場面で多くの選択をしているが、周囲の保護や干渉によって判断することが多い。どんな小さな行為でも自分で考え自分の意思で決定したものであるとの自覚に至れば、人間はその行為に対して責任をもつようになるだろう。そこで、**今回は近年多発する災害を、資料を通して自分事として捉え、根拠を挙げて友人と話し合う。そこで現実的な判断を下そうとすることにより、道徳的自覚に支えられた自立的な生き方につながる一歩とさせたい。**

○教材について（指導案より抜粋）

高齢の祖母が一人で家にいる状況の中、下校途中に避難勧告が出され、避難所である学校に戻るか、家に戻って祖母の様子を確認するかという選択で葛藤する主人公を通して、正しい判断をする難しさと大切さとに気付くであろう。

★防災という現代的課題からの問題解決を自ら判断しどう行動するかを考える機会につながった。（地域の防災の歴史を静岡県の特色ととらえて自作し